

図 1-6 国内での BSE 発生直後に安心感が低下した理由 (n=800, 複数回答)<sup>5</sup>

「安心感は一旦低下したが、その後 BSE 発生前のレベルに戻った」、もしくは、「安心感  
は特に変わらない」理由を図 1-7 に示す。「BSE に対して、検査体制や対策が確立された」  
という回答が 33.2% と最も多く、次いで、「牛肉によって健康被害が発生した例が少ない」  
が 32.4% と多くなっている。「その他」を選んだ回答者は、「確率が他の問題に対して低い」  
等、BSE 感染牛を食べる確率や人体への影響が出る確率が極めて低いこと等を理由として  
挙げている。

<sup>5</sup> 「国産牛肉に対する安心感が低下したときの気持ちに近いものを次の中からすべて選んでください」

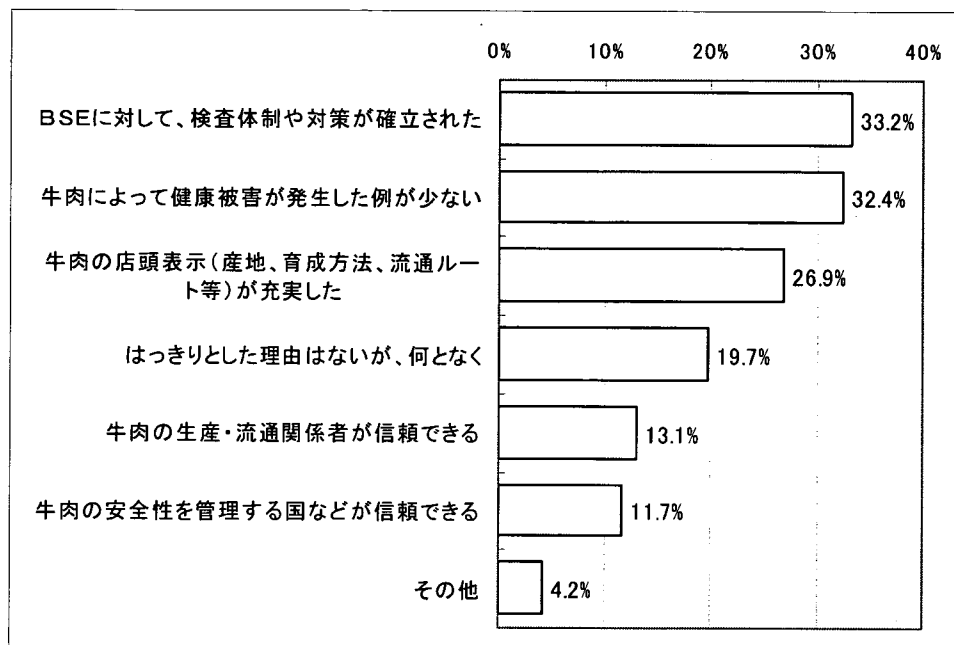


図 1-7 BSE 発生直後は一旦安心感が低下したが、その後高まった、もしくはもともと変わらない理由 (n=861, 複数回答)<sup>6</sup>

<sup>6</sup> 「国産牛肉に対する安心感が高まった(戻った)理由、もともと安心感が変わらなかった理由を次の中からすべて選んでください」

### 1.2.2 国産牛肉の BSE 対策

国が実施している国産牛肉の BSE 対策の認知度を図 1-8 に示す。最も認知度が高かったのは、「BSE 検査」で、約 8 割が知っていると答えている。次いで、「肉骨粉の牛の飼料としての使用禁止」が 71.3%、「食肉処理場等における特定危険部位 (SRM) の除去」が 62.2%、「BSE 発生国からの牛肉や飼料などの輸入規制」が 60.2%と多くなっている。一方で、「牛の生産履歴がわかるトレーサビリティ制度」や「死亡牛の届出及び BSE 検査」の認知度は他に比べて低く、BSE 対策の認知度にもばらつきがあることがわかる。

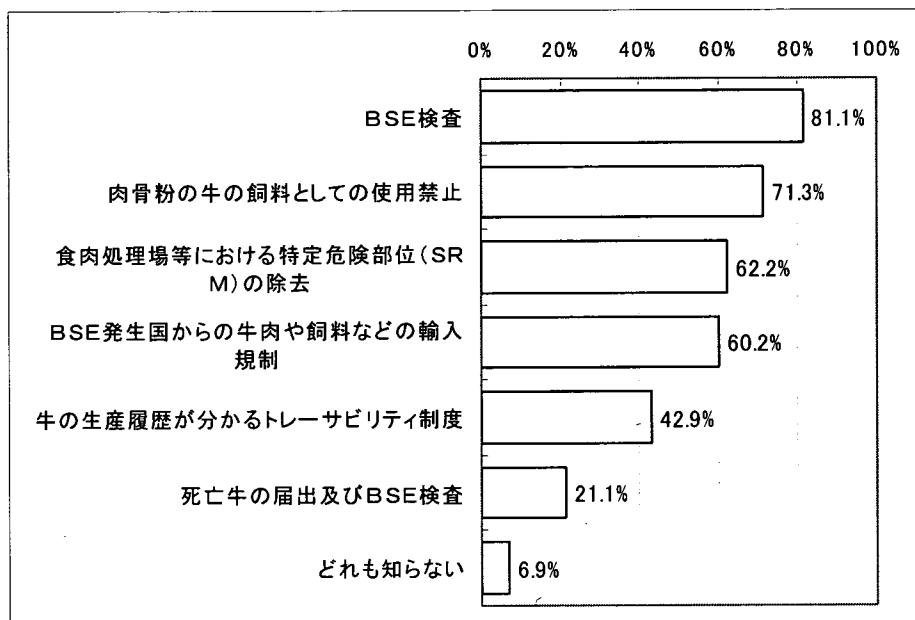


図 1-8 BSE 対策の認知度 (n=1197,複数回答)<sup>7</sup>

BSE 検査について「知っている」と答えた回答者の BSE 検査の内容についての認識を図 1-9 に示す。「BSE 検査は異常プリオンがあるかどうかを調べるものである」を選んだ回答者が最も多く、全体の約 6 割を占めた。次いで、「検査が義務づけられているのは 21 ヶ月齢以上である」とした回答者が 4 割を占めた。BSE に関して正しい認識も広がっている一方で、「BSE 検査は生きている牛で診察のような検査を行うことである」を選んだ回答者が約 2 割、「BSE 検査で、BSE に感染した牛は全て見つけられる」を選んだ回答者が約 1 割を占め、BSE 検査に関して間違った認識を持っている人も少なくないことが分かる。

<sup>7</sup> 「国産牛の BSE に対して、国では以下のような対策を実施しています。あなたの知っている対策を次の中からすべて選んでください」

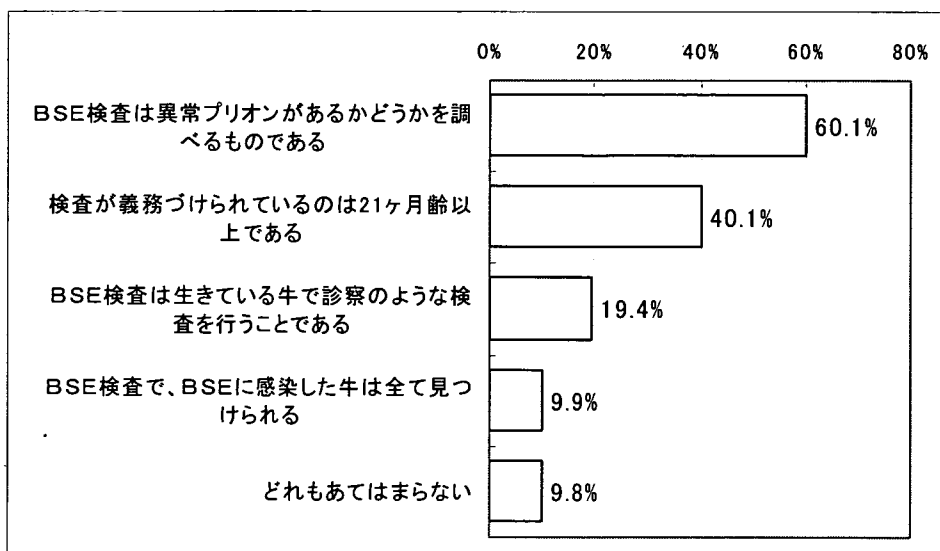


図 1-9 BSE の検査内容に関する知識 (n=971, 複数回答)<sup>8</sup>

また、図 1-10 に示すとおり、BSE 検査について知っていると感じた回答者の約半分が日本における BSE 検査の基準がアメリカの基準の影響を受けていると考えていることがわかった。

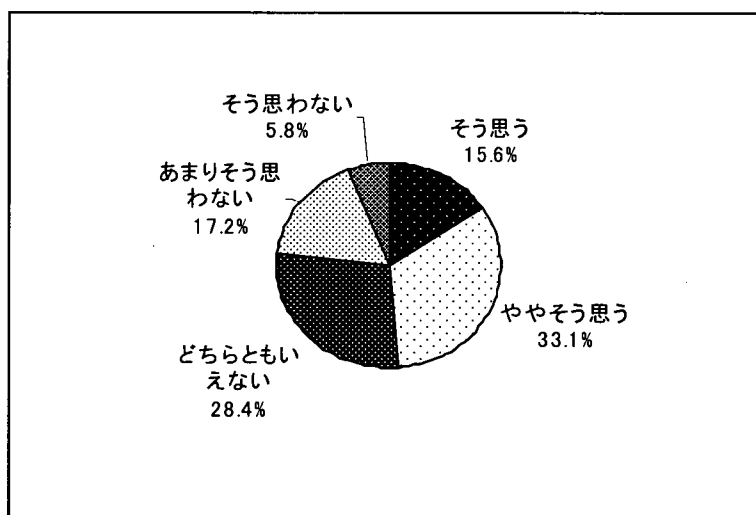


図 1-10 日本の BSE 検査基準にアメリカの基準は影響しているか (n=971, 単数回答)<sup>9</sup>

<sup>8</sup> 「BSE 検査についてお伺いします。BSE 検査について正しいと思うものをすべて選んでください」

<sup>9</sup> 「あなたは、日本における BSE 検査の基準は、アメリカの基準に影響を受けていると思いますか」

国産牛肉のBSE検査の義務付けが2005年8月以降から21ヶ月齢以上となったことについての認知度を図1-11に示す。「経緯等も詳しく知っていた」回答者は、全体のわずか4.4%にとどまり、半数弱は「知らなかった」と回答している。

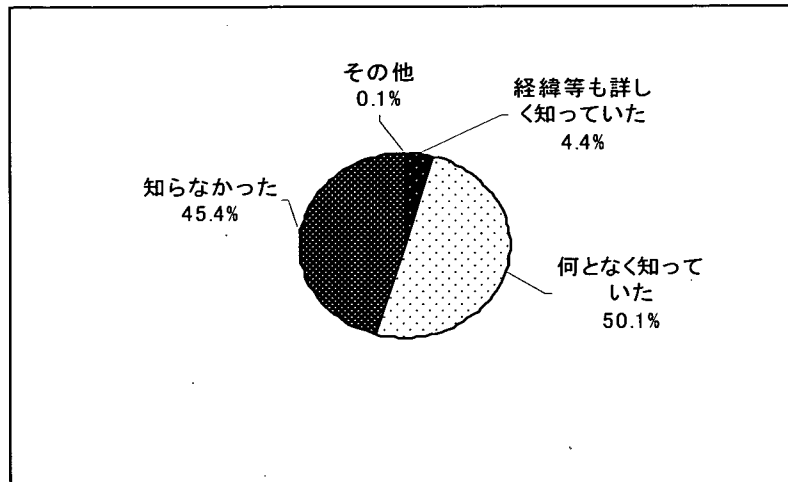


図1-11 BSE検査対象牛月齢の変更の認知度 (n=1197, 単数回答) <sup>10</sup>

21ヶ月齢未満の若齢牛に義務付けられていないことに対する考えを図1-12に示す。回答者のうちの62.8%が「検査をするべきだと思う」としており、「検査しなくてよいと思う」を選んだ回答者は、6.2%に留まっている。

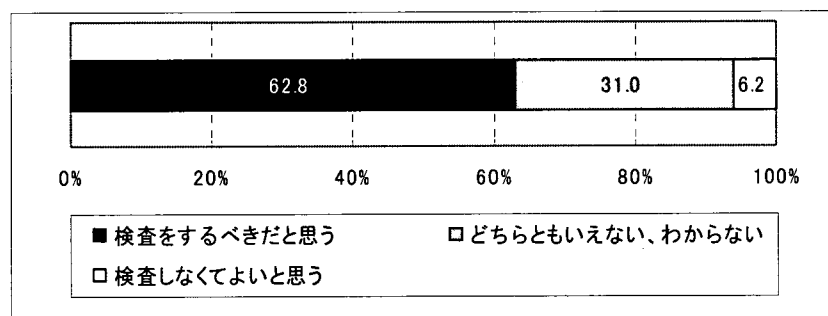


図1-12 21ヶ月齢未満の若齢牛のBSE検査に対する考え (n=1197, 単数回答) <sup>11</sup>

21ヶ月齢未満の若齢牛に対して「検査をするべきだと思う」もしくは「どちらともいえない、わからない」を選んだ理由を図1-13に示す。最も多かったのは、「検査により安全が確保されるため」で、54.9%を占めた。また、「なんとなく不安なので全て検査して欲しい」という意見も次いで多く、BSE検査に対する信頼の厚さが読み取れる。「その他」の理由としては、「プリオンの発生メカニズムが明確では無いため」等、BSEに関する不確実性

<sup>10</sup> 「国産牛肉のBSE検査が義務づけられているのは、2005年8月以降は21ヶ月齢以上であることをご存じでしたか」

<sup>11</sup> 「21ヶ月齢未満の若齢牛についてBSE検査が義務づけられていないことについて、どう思われますか」

から、「全て」を検査すべきとの意見が複数みられた。

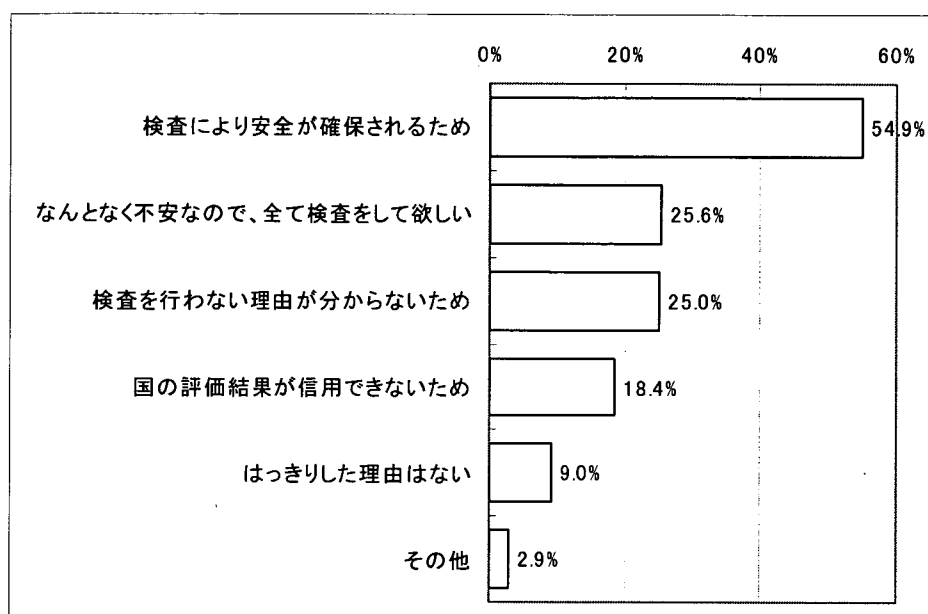


図 1-13 21ヶ月齢未満の若齢牛に対して BSE 検査をするべきと思う理由  
(n=1123, 2つまで複数回答)<sup>12</sup>

一方、「検査しなくてよいと思う」とした回答者が選んだ理由を図 1-14 に示す。最も多かったのは、「21ヶ月齢未満の牛の検査をしなくても、他の対策により安全性が確保されているため」であった。

<sup>12</sup> 「あなたが、21ヶ月齢未満の若齢牛について BSE 検査すべきだと思う理由、又はどちらともいえないと思う理由を次の中から2つまで選んでください」

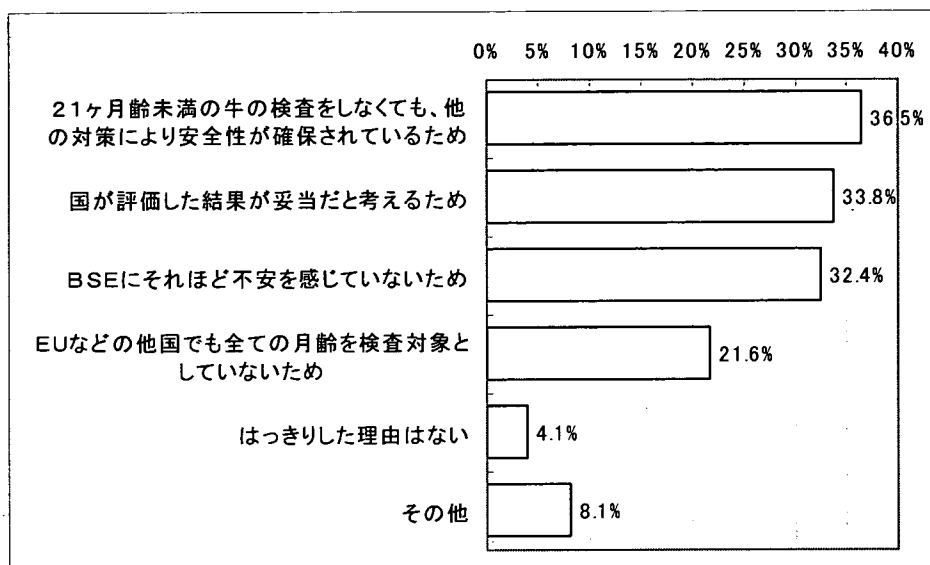


図 1-14 21ヶ月齢未満の若齢牛に対して BSE 検査をしなくてよいと思う理由  
(n=74, 2つまで複数回答)<sup>13</sup>

ここで、BSE 対策の内容について、説明を行った場合に、考えに変容がみられるかを検証するため、回答者に対し、訪問調査と同様の国産牛肉の BSE 対策に関する説明資料を提示し、更に後半部分の設問を続けた。

<sup>13</sup> 「あなたが、検査しなくてもよいと思う理由を次の中から2つまで選んでください」

説明資料で解説されている5つのポイントについての理解度を図 1-15 に示す。5つ全てにおいて、8割前後の回答者が「理解できた」もしくは「ある程度理解できた」と答えており、説明資料の内容は概ね理解されたことがわかる。

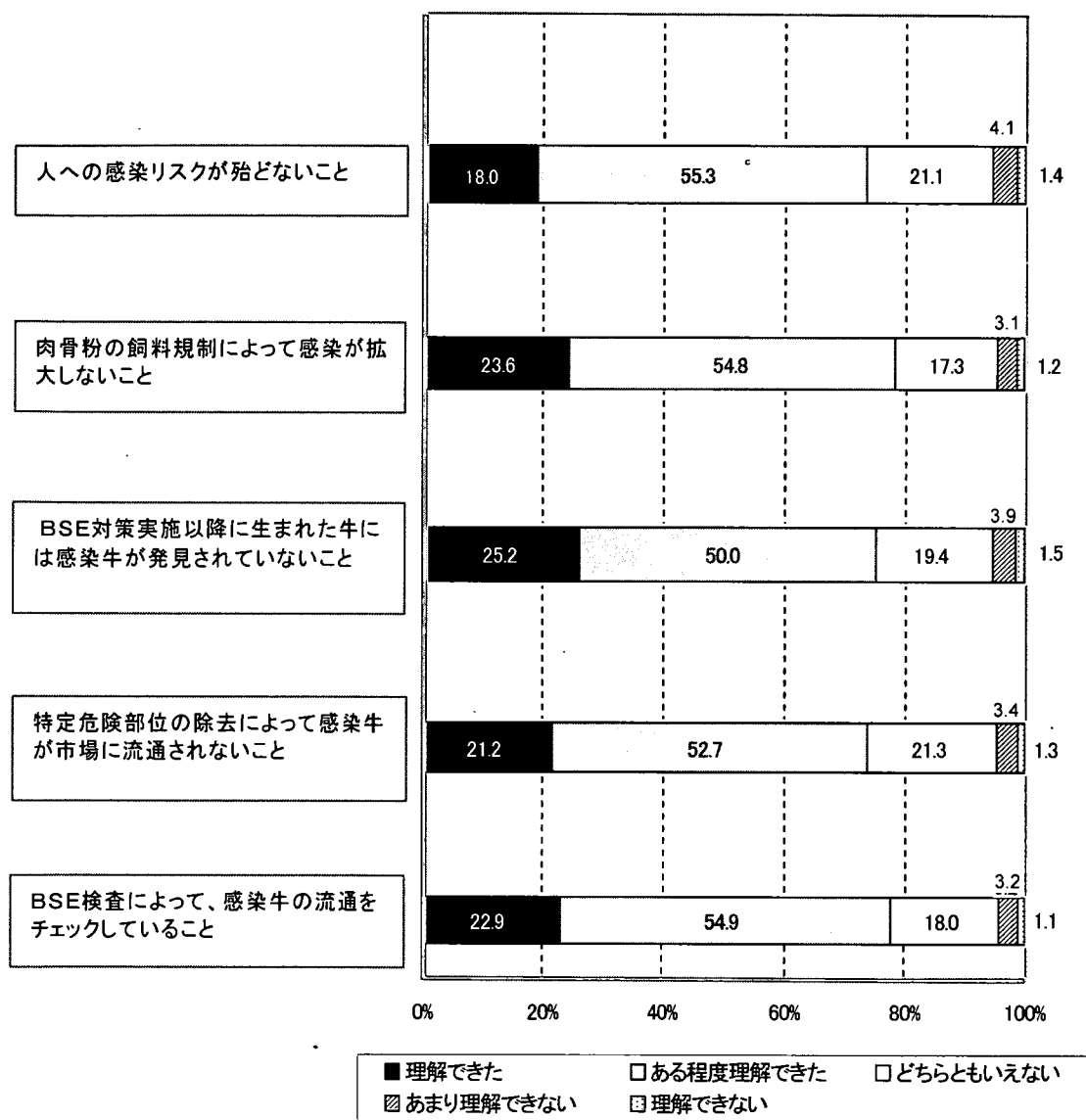


図 1-15 説明資料の理解度 (n=1197, 各単数回答) <sup>14</sup>

5つのポイントのうち、いずれかで「あまり理解できない」もしくは「理解できない」とした回答者にその理由を尋ねたところ、「用語がわかりづらい」等、一般には理解されにくい専門用語が使われている点を指摘する回答が多かった。また、「人への感染についてがわかりにくい」という回答も複数みられた。一方で、説明資料の内容とは別に、「理解できないというより、信頼できない」、「検査を信頼できない」、「表面上の話だけできちんと検査がされているかわからないため」等、対策の主体や実際の運用方法に対する不信感を示す回答が複数みられた。

<sup>14</sup> 「説明資料を見て、あなたは行政のBSE対策によってリスクが小さくなることについて理解ができましたか」



次に、説明後の国産牛肉の安全性に対する安心感の変化を図 1-16 に示す。説明を受け、「安心感が高まった」という回答が 26.2%、「変わらない（もともと安心している）」という回答が 36.3%を占め、BSE 対策の説明によって全体として国産牛肉に対する安心感は、同レベルを維持、もしくは高まったことがわかる。

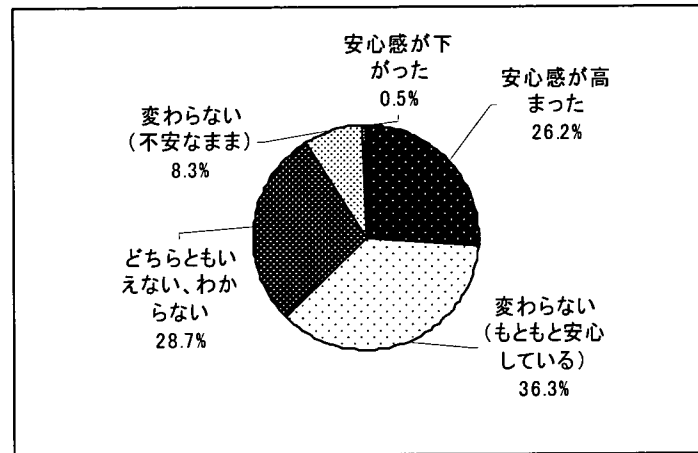


図 1-16 説明後の国産牛肉に対する安心感の変化 (n=1197, 単数回答) <sup>15</sup>

「安心感が高まった」もしくは「変わらない（もともと安心している）」とした理由を図 1-17 に示す。「危険な部位が除去されているため」という回答が最も多く、51.1%を占めた。次いで、「BSE 検査が理解できたため」、「感染した牛の肉が流通しないように検査されているため」が多く、約半分を占めている。

<sup>15</sup> 「説明によって、国産牛肉の安全性について、安心感はどのようになりましたか」

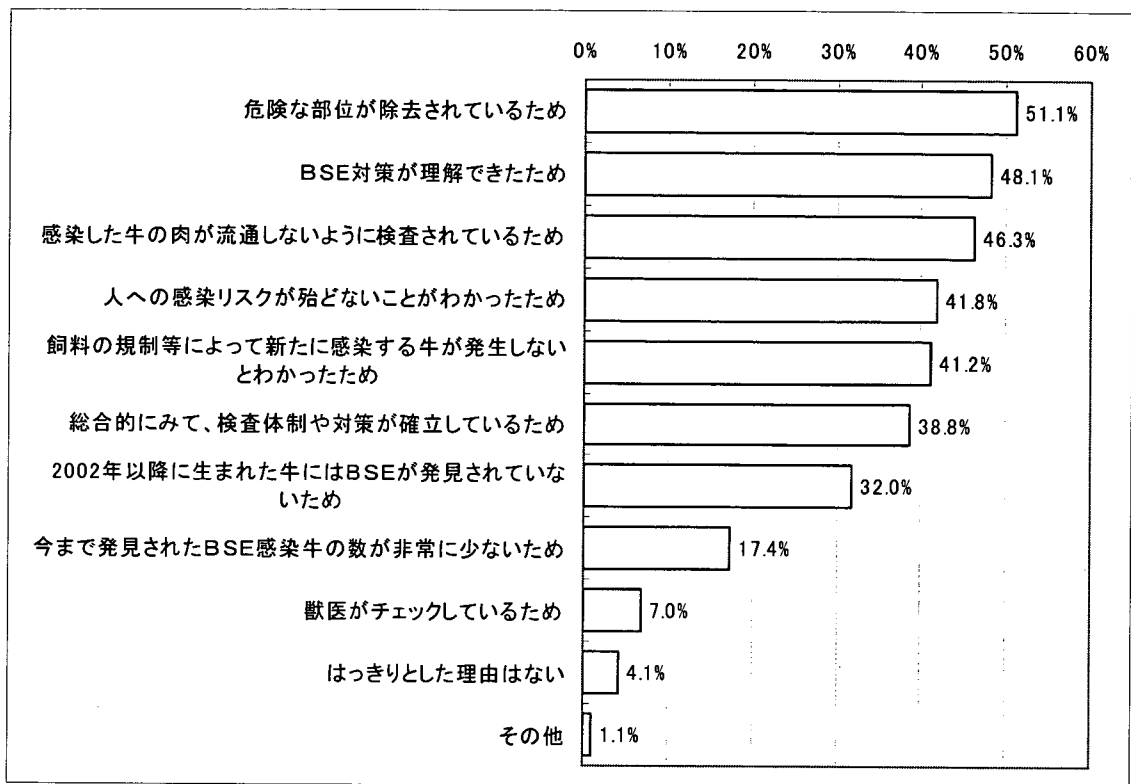


図 1-17 もともと安心している、もしくは安心感が高まった理由 (n=748, 複数回答)<sup>16</sup>

一方、「安心感が変わらない(不安なまま)」、「安心感が下がった」理由を図 1-18 に示す。「安全性を管理する国などの行政機関が信頼できない」とする回答が最も多く、64.8%を占めた。

<sup>16</sup> 「安心感が高まった、又はもともと安心している理由は次のうち、どれに当てはまりますか。あなたの気持ちに近いものをすべて選んでください」

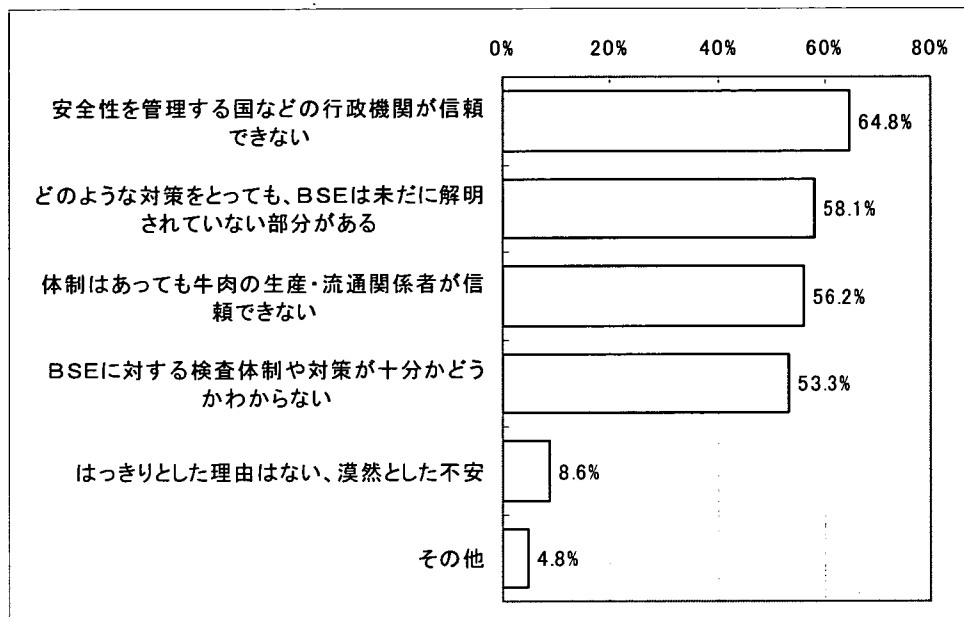


図 1-18 不安なまま、もしくは安心感が下がった理由 (n=105, 複数回答) 17

対策の内容について説明を受け、21ヶ月齢以上の牛に検査を義務づけることとした理由の理解度を図 1-19 に示す。全体の約 8 割が「理解できた」もしくは「ある程度理解できた」と回答している。

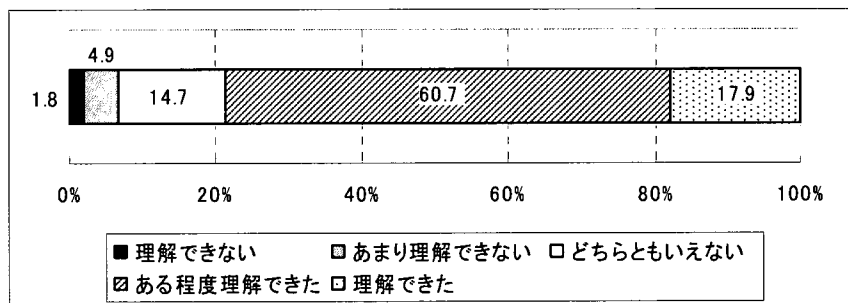


図 1-19 BSE 検査を 21ヶ月齢以上の牛に義務付ける理由の理解度 (n=1197, 単数回答) 18

BSE 検査の義務付けを 21ヶ月以上とすることに対する考えを図 1-20 に示す。「賛同できる」、「ある程度賛同できる」としたのは、全体の 45.6%であった。

説明を受ける前に 21ヶ月例未満の牛について検査をするべきかについての考え (図 1-12)、説明後の BSE 検査の対象月齢を 21ヶ月以上としたことへの理解度 (図 1-19)、および図 1-20 を比較すると、対策の内容と理由付けをわかりやすく説明すれば、理解を得られ、また、対策に対する賛同を得られる傾向にあることがわかる。

17 「安心感が変わらない (不安なまま)、又は下がった理由はどのようなものですか。すべてお選びください」

18 「あなたは、21ヶ月齢以上の牛に検査を義務づけることとした理由が理解できましたか」

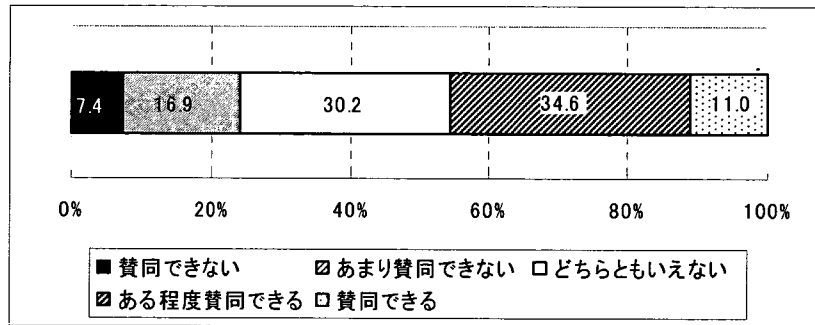


図 1-20 BSE 検査の義務付けを 21 ヶ月齢以上の牛とすることに対する考え  
(n=1197, 単数回答) <sup>19</sup>

BSE 検査の義務づけを 21 ヶ月齢以上の牛とすることに「賛同できる」もしくは「ある程度賛同できる」とした理由を図 1-21 に示す。最も多かったのは、「科学的に評価された対応として妥当だと考えるため」という回答で、56.6%を占めた。対策の背景にある科学的な評価内容についても、わかりやすい説明を心がければ、理解が得られる傾向があることがわかる。

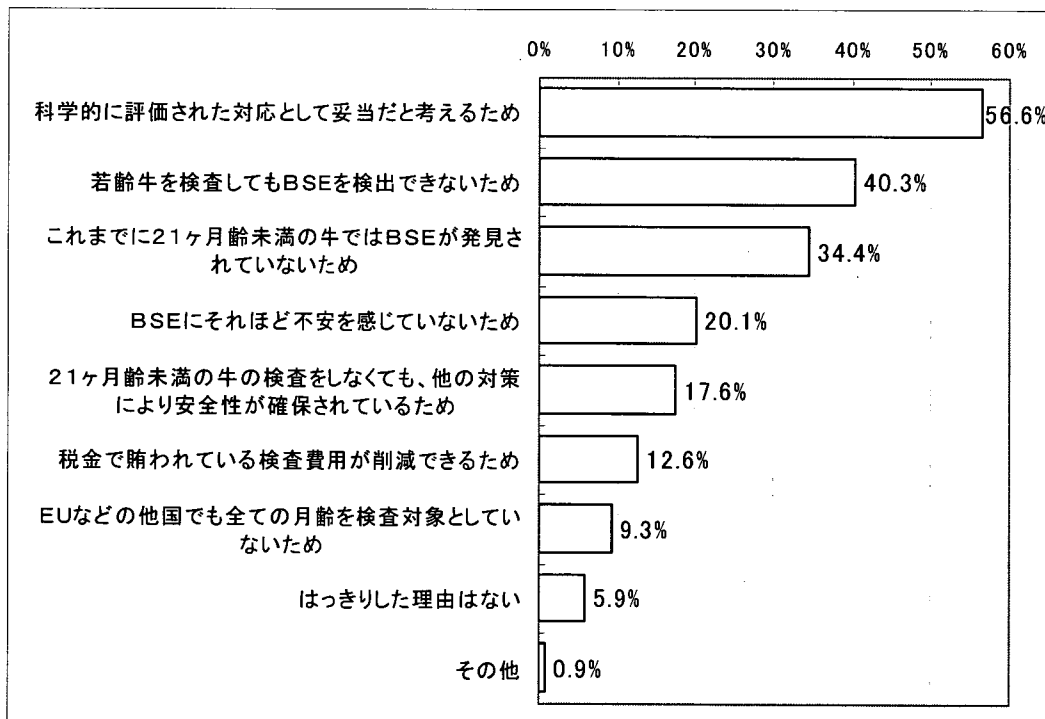


図 1-21 BSE 検査対象を 21 ヶ月齢以上の牛とすることに賛同できる理由  
(n=546, 複数回答) <sup>20</sup>

<sup>19</sup> 「あなたは検査の義務づけを 21 ヶ月齢以上の牛とすることについてどう思いますか」

<sup>20</sup> 「あなたが、検査の義務づけを 21 ヶ月齢以上の牛とすることに賛同できる理由を次

BSE 検査の義務づけを 21 ヶ月齢以上の牛とすることに「賛同できない」もしくは「あまり賛同できない」とした理由を図 1-22 に示す。最も多かったのは、「21 ヶ月齢未満の牛でも、今後 BSE が発見される可能性があるため」という回答で、60.7% を占めた。ここでも BSE についての不確実性が BSE 検査に対する考え方に大きく影響していることがわかる。「その他」としては、「検査法の進歩により検査可能になるかもしれないから」等の理由が挙げられている。

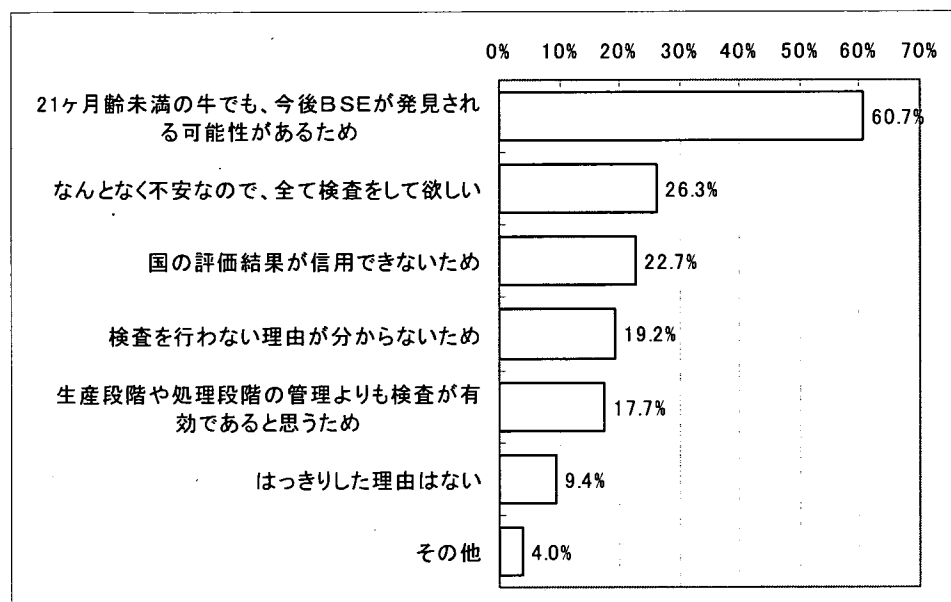


図 1-22 BSE 検査対象を 21 ヶ月齢以上の牛とすることに賛同できない理由 (n=651, 複数回答)<sup>21</sup>

21 ヶ月齢未満の若齢牛について BSE 検査が行われない場合の牛肉の食べ方が変化を図 1-23 に示す。「変化と思う」、「ある程度変化と思う」としたのは、全体の約 3 割であった。

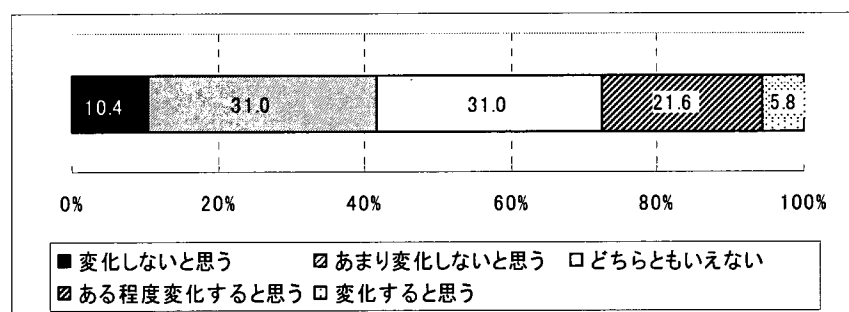


図 1-23 牛肉の食べ方の変化 (n=1197, 単数回答)<sup>22</sup>

の中からすべて選んでください」

<sup>21</sup> 「あなたが、検査の義務づけを 21 ヶ月齢以上の牛とすることに賛同できない理由を次の中からすべて選んでください」

国産牛肉に関するその他の不安として挙げられたものを図 1-24 に示す。最も多かったのは、「流通段階で、検査されていない肉と混じる可能性があること」という回答で、全体の46.8%を占めた。ここでも、対策の運用方法について不信感を持っている人が少なくないことが読み取れる。「その他」の回答としては、「食肉加工処理の現場がみえないことへの不安」、「本当に危険部位が除去されているかどうか」「流通業者や販売業者が偽装しないか不安」等、業者に対する不信感、および「政府が信用できないから」、「国の認識が甘く、どんな対策をされても信用できない」等、国への不信感を示す回答も複数みられた。

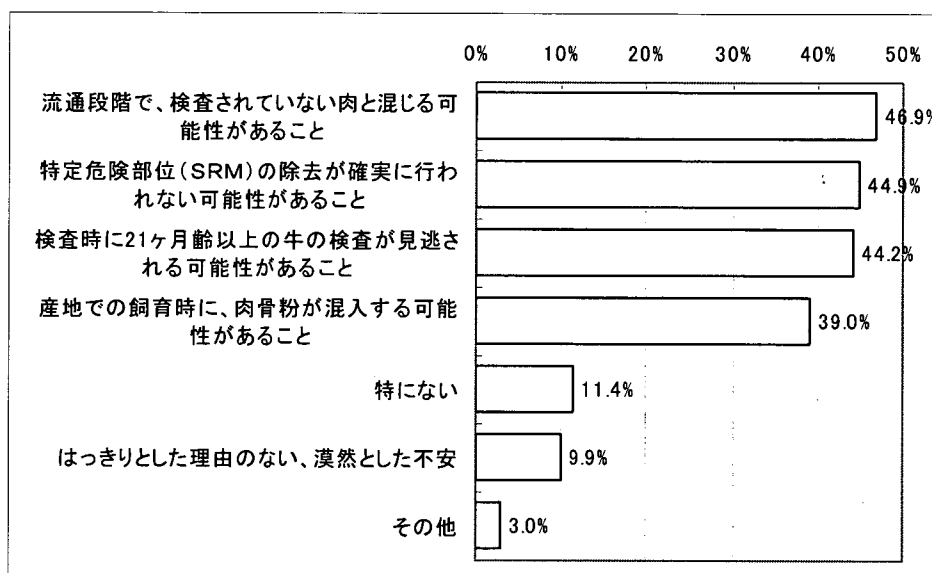


図 1-24 国産牛肉に関するその他の不安 (n=1197, 複数回答) <sup>23</sup>

国の安全対策の決定方法に関する理解度を知るため、以下の考え方に対する感想を尋ねた。その結果を図 1-25 に示す。「理解できる」および「ある程度理解できる」とした回答者が全体の75.9%を占め、大多数がこの考え方に理解を示している。

国などでは食品の安全性等に関する様々な調査・評価等を行っていますが、ある食品の安全性に関する問題が発生し、その当初の時点では、その原因や人への影響がわからないことがあります。その場合はあらゆる可能性を想定して、安全性を確保する観点に立ってより慎重に過剰的に対策をとる場合があります。

その後の調査や研究などで、原因や必要な対策等が明らかになってきた場合、それらの知見に基づいて対策を見直す（知見に見あった対策に緩和する）という考え方について、お伺いします。

<sup>22</sup> 「21ヶ月齢未満の若齢牛についてはBSE検査が行われないとすると、あなたの牛肉の食べ方は変化すると思いますか」

<sup>23</sup> 「国ではBSE対策を推進していますが、あなたはその他にどのような不安がありますか。次の中から当てはまるものをすべて選んでください」

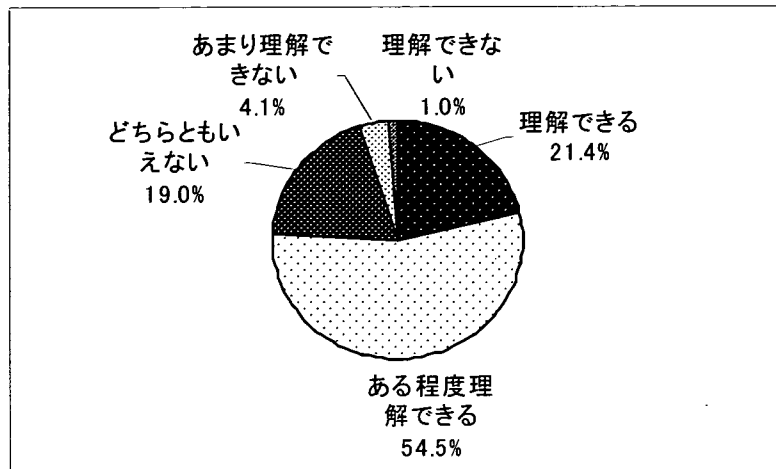


図 1-25 国の安全対策の見直しの考え方に対する理解度 (n=1197, 単数回答) <sup>24</sup>

また、この考え方について「理解できない」もしくは「あまり理解できない」とした回答者にその理由を尋ねた。その結果を図 1-26 に示す。最も多かったのは、「はっきりした根拠はないが、何となく不安」の 41.0%であった。

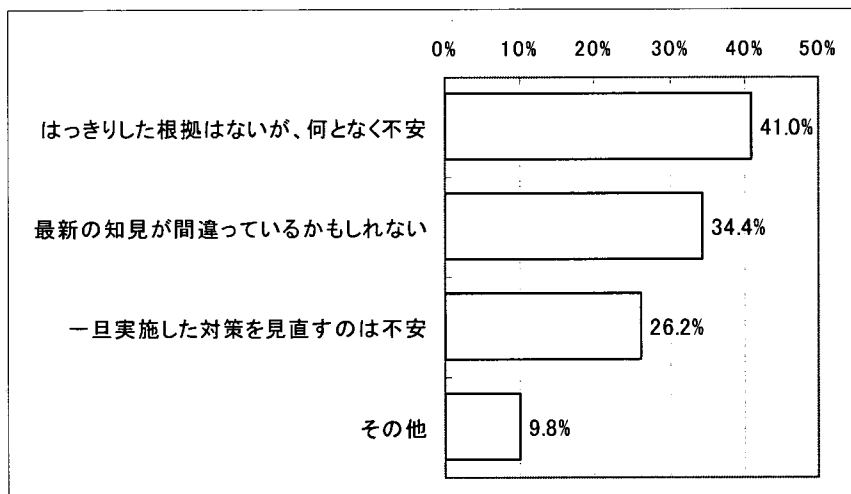


図 1-26 対策見直しの考え方が理解できない理由 (n=61, 複数回答) <sup>25</sup>

<sup>24</sup> 「あなたは、この考え方についてどう思われますか」

<sup>25</sup> 「必要な対策のみ実施し、その他の対策は見直す、という考え方が理解できない理由について、あなたの気持ちに近いものをお伺いします」

### 1.2.3 情報提供方法

国産牛肉の安全性に関する情報提供方法について検討するために、既存資料のわかりやすさを確認した。本アンケートで提示した説明資料では、厚生労働省や内閣府食品安全委員会等が開催する意見交換会や配布されたり、ホームページに掲載されているパンフレット等で国の BSE 対策に関する説明の中で実際に使用されている図を使った。これらの図のわかりやすさに関する感想を図 1-27 に示す。(図表番号との対応は、図 1-28 参照) 最もわかりやすいとされたのは、牛の特定危険部位を示した図で、逆に最もわかりにくいとされたのは、日本の BSE 陽性牛の生年月日と確認年月日を示した図であった。

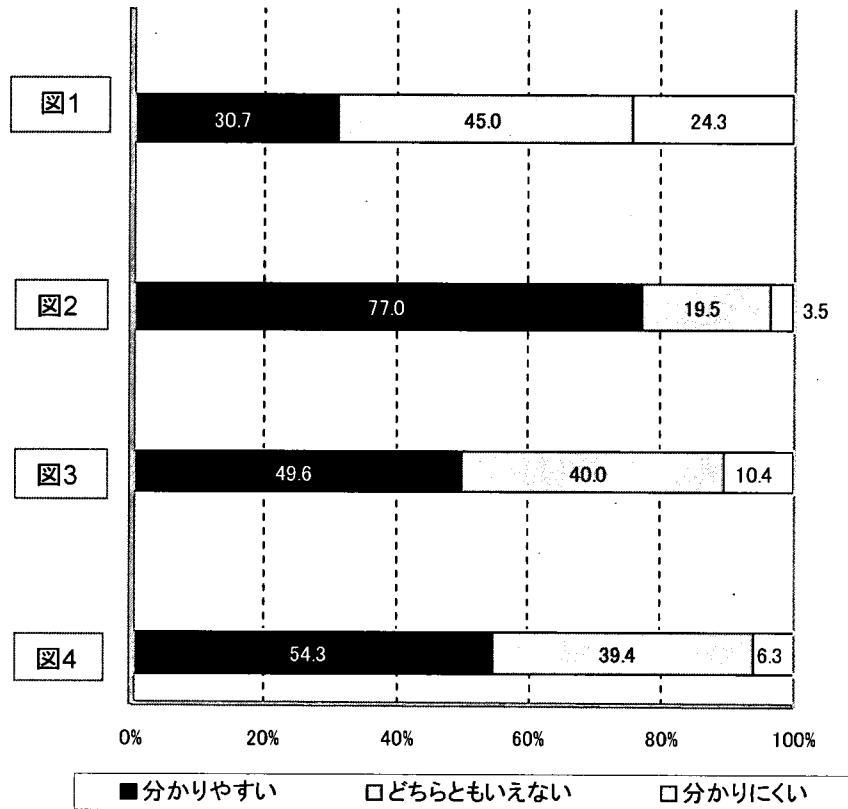


図 1-27 図のわかりやすさ (n=1197, 各単数回答) <sup>26</sup>

<sup>26</sup> 「説明に使用したグラフや図は、国が出すパンフレット等に掲載されていますが、どの図が分かり易かったですか」



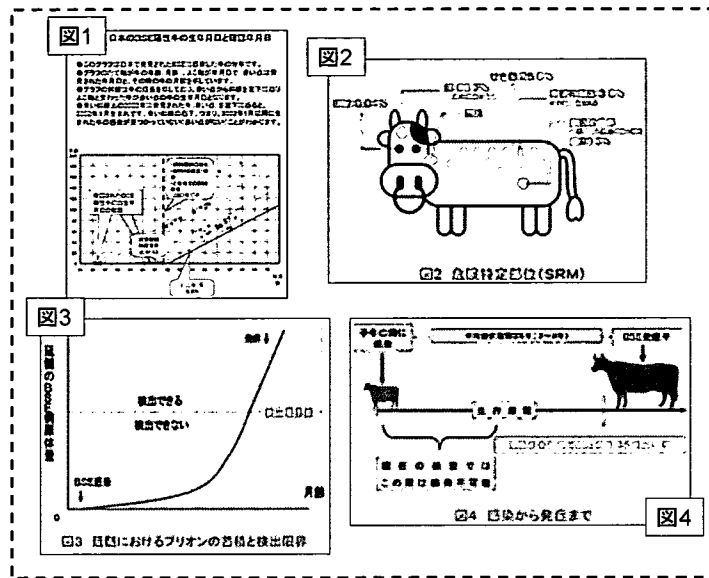


図 1-28 説明資料に使われている図表

BSE 対策について、望まれている情報提供方法について図 1-29 に示す。最も多かったのは、「テレビなどでの説明」で全体の 56.8%、次いで、「スーパーなどの店頭でのわかりやすい説明のボード等の掲示」の 53.6%、および「新聞などでの解説文の増大」の 53.0% であった。「その他」の回答としては、「インターネットでの広報」という回答が複数みられたほか、「国の関与が無い消費者側の調査結果が欲しい」等、第三者機関からの情報を求める声もある。

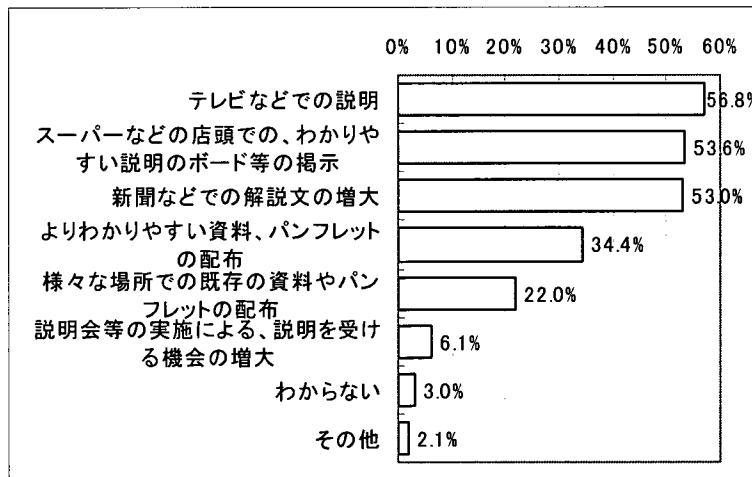


図 1-29 BSE 対策の情報提供方法(n=1197, 複数回答)<sup>27</sup>

望まれるパンフレット、ポスターの配布・掲示場所について図 1-30 に示す。最も多かつ

<sup>27</sup> 「BSE対策について、あなたはどのような方法で情報を提供されると理解ができると思いますか」

たのは、「スーパー、小売店などの食品売場の店頭」で、全体の77.9%を占めた。次いで、「新聞折り込み」という回答が56.6%と多かった。「その他」の回答としては、「町内の掲示板」、「電車の吊広告」等が挙げられている。

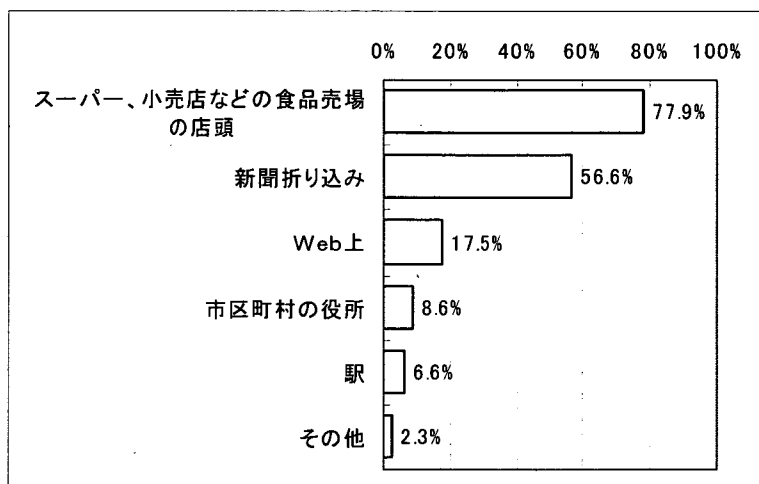


図 1-30 パンフレット・ポスターの配布・掲示場所 (n=1197, 2つまで複数回答) <sup>28</sup>

入手したい情報の内容について、図 1-31 に示す。最も多かったのは、「食品表示の徹底・充実による情報提供」で全体の65.7%を占めた。

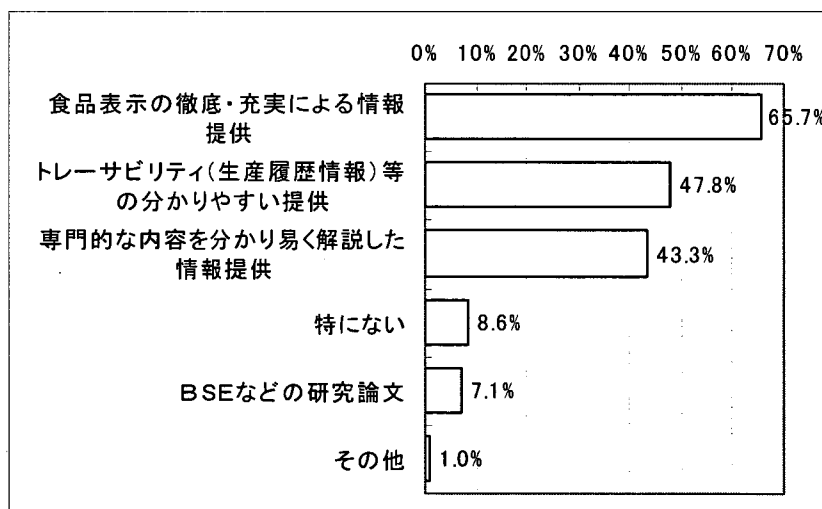


図 1-31 入手したい情報の内容 (n=1197, 複数回答) <sup>29</sup>

また、どのような情報媒体から情報が得たいかについて尋ねた結果を図 1-32 に示す。最も多かったのは、「ニュース番組」の68.9%で、次いで、「インターネットニュース」の62.3%であった。インターネット普及率の増加を反映し、インターネットニュースがテレビ、新

<sup>28</sup> 「パンフレットやポスターはどこで配布、又は掲示されると、いいと思いますか。次の中から2つまで選んでください」

<sup>29</sup> 「あなたは、どのような内容の情報を得たいと思いますか」

聞と並ぶ結果となった。「その他」の回答として、「オレンジページなどの料理主体の本」という回答もみられた。

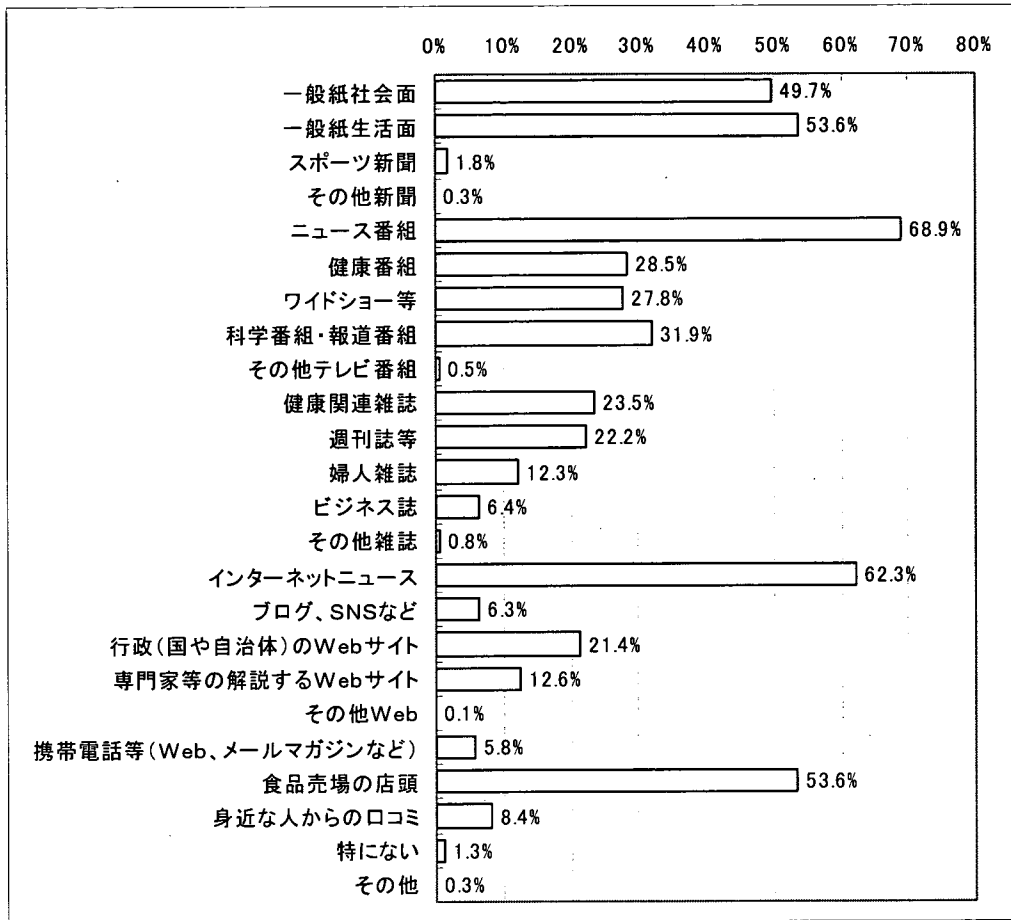


図 1-32 好まれる情報媒体 (n=1197,複数回答)<sup>30</sup>

次に、それぞれの情報媒体の信頼度を測るため、どの情報媒体が正しいことを伝えているかと思うかについて尋ねた。その結果を図 1-33 に示す。最も多かったのは、「新聞」の 62.1%、次いで「テレビ」の 41.8%であった。

<sup>30</sup> 「あなたは、どの情報媒体から情報を得たいと思いますか。次の中からすべて選んでください」

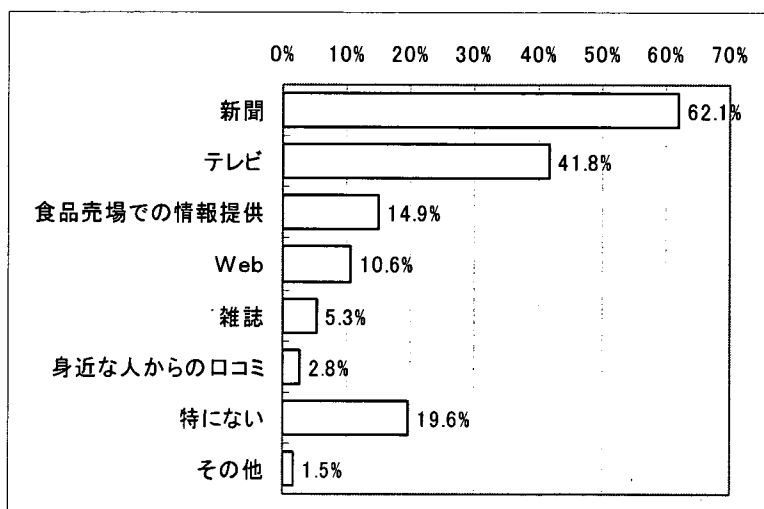


図 1-33 正しいことを伝えていると思う情報媒体 (n=1197, 複数回答) <sup>31</sup>

更に、食品の安全に関連する人や組織について、消費者の安全をどの程度考えていると思うかについて尋ねた結果を図 1-34 に示す。最も消費者の安全のことを考えているとされたのは、「消費者団体」の 30.0%、次いで「研究者・専門家 (大学、研究機関等)」の 20.1% であった。逆に「マスコミ」、「小売業者、流通業者」、「国や地方自治体」が消費者の安全を考えていると思うとする回答者の割合は低く、それぞれ順に、3.2%、4.6%、6.3%であった。

<sup>31</sup> 「あなたは、どの情報媒体が正しいことを伝えていると思いますか」